

ドイツのクリスマスとメルヒェン

金城ハウプトマン朱美

はじめに

クリスマスは言うまでもなくイエス・キリストの誕生を祝う祭りであるが、ドイツで教会に属するキリスト教者は年々減り続け¹、毎週ミサに出かける信者も減少している。そのため多くの家庭では、クリスマスを祝う宗教的意味が薄れ、家族が集い共に食事をし、プレゼントしたり、家族と一緒に過ごせるという幸せを再確認する祝日のようである。各々の家庭でクリスマスの過ごし方が異なり、またそれが各家庭の伝統となり、クリスマス前の待降節の過ごし方も各家庭で伝統的に発展し、習慣化されている。待降節の間中は、アドベンツクランツのロウソクに火を灯したり、週末にお決まりのクリスマスクッキー（Plätzchen）を焼いたり、アドベンツカレンダーの扉を一つひとつ開いたりして、子ども大人も12月24日が来るのを心待ちにしているのだ。

この期間中にクリスマスマーケットも各地で開かれ、特設舞台にはメルヒェンの語り手（Märchenerzähler）が登場するマーケットもある。ショッピングセンターの催事広場にもメルヒェンの語り手が招待されて、子どもや大人に主にグリム童話を語る。カッセルや、ハンブルク、ベルリンなどではメルヒェンをテーマにしたクリスマスマーケットも開催される。カッセルのクリスマスマーケット内には、有名なグリム童話のあらすじが展示されていたり、ハンブルクではアルスター湖に浮かぶ5隻の遊覧船の屋根の部分にグリム童話の1シーンの絵が飾られて、夜になるとライトアップされたりする。ベルリンの狩猟城では、2日間限定の

1 http://fowid.de/fileadmin/datenarchiv/Religionszugehoerigkeit/Religionszugehoerigkeit_Bevoelkerung_2010_2013.pdf (27.12.2014)

メルヒェンクリスマスマーケットが開催され、野外ステージで「ヘンゼルとグレーテル」や「灰かぶり」などの寸劇が上演され、ホレおばさんも登場する。

12月ごろから書店にはクリスマスをテーマにした図書と並んで、メルヒェン集が平積みされたコーナーができるので、この時期にメルヒェン本の需要が多いことが分かる。テレビの番組表を見てみると、12月にはメルヒェン映画の放送回数が増え、1998年頃から特に24日から26日の間にその傾向が顕著に現われている²。なぜこれほどまでにクリスマスの時期になるとメルヒェンの需要が高まるのかという疑問を出発点とし、クリスマスメルヒェン（Weihnachtsmärchen）と呼ばれるグリム童話とアンデルセン童話、さらにクリスマスにテレビ放送されるドイツ映画株式会社（*Deutsche Film Aktiengesellschaft*、略して DEFA）製作の映画「灰かぶりの三つのハシバミの実」（*Drei Haselnüsse für Aschenbrödel*, 1973）³を取り上げ、この時期にメルヒェンに希求されている事柄を文化科学的視点から浮き彫りにし、クリスマス時期におけるメルヒェンの意義について考察することを、本論文の目的とする。

1. クリスマスメルヒェン

『メルヒェン百科事典』（*Enzyklopädie des Märchens*, 2013）のハンス＝イェルク・ウター（Hans-Jörg Uther）による見出し語（Weihnachtsmärchen）によると、「クリスマスの時期に上演される舞台作品や、時期的に見てクリスマスや冬にまつわる作品に与えられた書籍ジャンルの名称」⁴と定義され、19世紀中頃からこのようなメルヒェンの公演数がヨーロッパで増えたそう⁵。ドイツにおいてこれらの公演の文学的素材になって

2 Vgl. <http://www.fernsehserie.de> (27.12.2014)

3 *Drei Haselnüsse für Aschenbrödel*. R.: Václav Vorlíček; DDR 1973. このメルヒェン映画を MF と略す。

4 Uther, Hans-Jörg: „Weihnachtsmärchen“. In: Brednich, Rolf W. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 14. Berlin / New York: De Gruyter 2013, Sp.562-565, hier Sp.562.

5 エンゲルバート・フンパーディンク作曲（Engelbert Humperdinck）の「ヘンゼル

いるものとして、ヤーコプ・グリム (Jacob Grimm) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm) の蒐集したメルヘンや、ハンス・クリスティアン・アンデルセン (Hans Christian Andersen) の創作童話 (Kunstmärchen) などが挙げられている⁶。ウターは、代表的なクリスマスメルヘンとして次のものを挙げている。グリム兄弟著『子どもと家庭のメルヘン集』(*Kinder- und Hausmärchen*⁷, 1857) の「蛙の王様あるいは鉄のハンス」(KHM1⁸ „Der Froschkönig“)、 「兄と妹」(KHM11 „Brüderchen und Schwesterchen“)、 「ヘンゼルとグレーテル」(KHM15 „Hänsel und Gretel“)、 「灰かぶり」(KHM21 „Aschenputtel“)、 「ホレおばさん」(KHM24 „Frau Holle“)、 「ブレーメンの音楽隊」(KHM27 „Die Bremer Stadtmusikanten“) と 「雪白と薔薇赤」(KHM161 „Schneeweißchen und Rosenrot“)、 アンデルセン童話では 「雪の女王」 („Snedronningen“)、 「マツチ売りの少女」 („Den Lille Pige med Svovlstikkerne“) や、 E.T.A. ホフマン (E.T.A. Hoffmann) の 「くるみ割り人形とネズミの王様」 (*Nußknacker und Mäusekönig*, 1816)、 チャールス・ディケンズ (Charles Dickens) の 「クリスマス・キャロル」 (*A Christmas Carol: Being a Ghost Story of Christmas*, 1843) といった文学作品である⁹。先にも述べたように、本稿ではメルヘンのみを考察の対象にし、以下、それぞれのメルヘンから、これらのクリスマスメルヘンの特徴を探る。ウターが指摘したクリスマスメルヘンの他に、アンデルセンの童話「樅の木」 („Grantæet“) もクリスマスにまつわる話なので、考察に加える。本論

とグレーテル」が1891年に初演され、それよりも前にイタリアでは作曲家ジョアキーノ・ロッシニ (Gioachino Rossini) により1817年にオペラ「チェネレントラ」 (*La Cenerentola*) が初演され、今日でも上演されている。「チェネレントラ」はジャンバティスタ・バジレ (Giambattista Basile) の『ペンタメローメ』 (*Pentamerone*, 1634/1636) に収録されており、「灰かぶり」の下地になっていると考えられる (Vgl. Brüder Grimm: *Kinder-und Hausmärchen*, Band 3. Stuttgart: Reclam 1994, S.50-51)。

6 ebd., Sp.563.

7 『グリム童話集』と呼ばれているメルヘン集である。略してKHM。

8 各メルヘンには通し番号がつけられており、決定版 (1857年出版の第7版) の番号を用いる。

9 wie Anm.6.

文の構成上アンデルセンのメルヒェンから確認していく。

2. アンデルセン童話のクリスマスメルヒェン

グリム童話が民話 (Volksmärchen) と呼ばれることに対して、アンデルセンのメルヒェンは、口承文芸をもとにしたたり作者の想像力に任せて書かれたりする話なので、創作メルヒェン (Kunstmärchen) と呼ばれている。アンデルセンは幼少期に聞いた話や、読み聞かせてもらったメルヒェンを素材として、1835年から創作メルヒェンを発表し始めた。グリム兄弟と彼の決定的な違いは、アンデルセンは完成した童話を子どもたちの前で読んで聞かせて、反応を確かめては書き換え、作品を仕上げしてから出版していた点である¹⁰。こうして彼は156の童話を発表し、彼の生前にドイツ語訳の全集が出版されていた¹¹ことから分かるように、当時のドイツ語圏の人びとはアンデルセン童話に関心があった。

2.1 「雪の女王」のあらすじ

男の子カイと女の子ゲアダは大の仲良しだった。ある日、悪魔の鏡が割れ、その破片がカイの目と心臓に刺さり、カイが優しくなくなった。カイが一人で橇遊びに出かけたまま行方不明になったので、ゲアダが彼を探しに旅に出る。道中、魔女に魔法にかけられてカイのことを忘れたこともあったが、魔法が解けるとカイのことを思い出し、花にカイの居場所を訊きながら進んでいくと、鴉からカイは王女のところにいと聞く。その王女を探しあてて王子に会ってみたが、人違いだった。森の中で盗賊に出会い殺されそうになるが、盗賊の娘に助けられた。盗賊の城へ連れて行かれ、そこには森中の小動物が住んでいた。盗賊の娘にカイ

10 Vgl. Holbek, Bengt: Art. „Hans Christian Andersen“. In: Ranke, Kurt (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 1. Berlin / New York 1975, Sp.490–493, hier Sp.492.

11 アンデルセンはグリム兄弟のようにメルヒェン集を出版せず数話ずつ発表していた。Andersen, Hans Christian: *Sämtliche Märchen*. Mit 125 Illustrationen nach Originalzeichen von Vilhelm Petersen. Leipzig: Teubner 1850.

のことを話すと、それを聞いていた鳩が、「カイは雪の女王に連れて行かれた」と教えた。トナカイが、カイは北極のラップランドに言うので、ゲアタを連れて行った。そこでラップ人に会うが、フィン人ならカイの居所が分かると言われ、フィン人のところへ行き、カイは雪の女王のところにいると聞いた。しかし、カイの胸に刺さったガラスの破片が取れない限り、カイを解放できないことを知る。雪の女王の城でカイと再会するが、カイはゲアダのことを忘れていた。彼女が涙を流し、その涙がカイの心臓まで伝わると、凍った心臓が融けて鏡の破片も落ちた。こうしてカイは元に戻り、ゲアダと家に帰った。彼女のカイへの深い友情がやがて愛情に変わり、二人は恋人同士になった。

2.2 「マッチ売りの少女」のあらすじ

大晦日の夜、寒くて暗い街中で貧しい少女が裸足で歩いてマッチを売っている。マッチを売らずに家に帰ると父親に殴られるので、マッチが売れるまで家に帰れない。少女は寒さに耐え切れず、マッチに火を付けた。すると急に暖かくなり、めらめらと炎が燃える暖炉が目の前に現れたので、足を温めようとする、マッチの火が消えてしまった。2本目のマッチに火をつけると、アヒルの丸焼きやご馳走がのったテーブルが見えた。アヒルがテーブルから下りてきて少女の方に向かってきたかと思うと、マッチの火が消えた。3本目のマッチに火をつけると、今度は今までみたこともない美しいクリスマスツリーの下に座っていた。流れ星が見えたので、亡くなった祖母から「流れ星は死んだ人の魂が天に昇って行くときに見える」と聞いたことを思い出す。4本目のマッチに火をつけると、祖母が目の前に現れた。長い間、少女は祖母と会っていなかった。マッチを次々に擦っておばあさんを見続けた。するとおばあさんは女の子を胸に抱え、昇天した。翌日、女の子が死んでいた。

2.3 「樅の木」のあらすじ

森の中で太陽の光をたっぷり浴びて立派に成長した樅の木が、クリスマスツリーになるのを夢見ていた。望みが叶ったが、実際にクリスマス

ツリーとして活躍したのはたった1日だけで、2日目には早々と飾りも外され、屋根裏部屋の窓のない暗い場所に置きっぱなしにされた。春になり、樅の木が中庭に下ろされた。子どもには古い樅の木だと嘲笑され、最後は小さく刻まれて薪にされて、樅の木の思い通りに生涯を閉じれなかった。

2.4 アンデルセンのクリスマスメルヒェンの特徴

アンデルセンのクリスマスメルヒェンには、クリスマスにまつわるアイテムが登場しているのが特徴である。「マッチ売りの少女」や「樅の木」にはクリスマスツリーが登場し、「雪の女王」にはクリスマスに理想とされている白銀の世界が現われる。各話に子どもが登場するが、「雪の女王」に登場する子どもたちとマッチ売りの少女は貧しい家庭の子どもで、「樅の木」に登場する子どもたちは裕福な家庭の子どもたちだから両者は対照的だ。後者に登場する子どもは、枯れてしまった樅の木を嘲笑するので良い子とは言い難い。「雪の女王」はハッピーエンドだが、他の2話は不幸な結末を迎える。クリスマスの祭りの中心人物である子どもがハッピーエンドを迎えない話を聞くと、子どもたちはどう思うのだろうか。自分の置かれている恵まれた環境に感謝するのだろうか。あるいは親たちは、自分の子どもが不幸な環境にいないことを幸せに思うのであろうか。恵まれない子どもたちに慈悲の心を持つように促がしたいのかもしれないが、記憶に残る話であろう。

「樅の木」の話からは、自然環境保護が思い起こされ、現代にも通じるメッセージが含蓄されている。世界中で年々クリスマスツリーの需要が増え続けていて、2013年にはドイツ国内だけでも3000万本のクリスマスツリーが販売されている¹²。木は1月に自治体により回収され、ベルリン市の場合には火力発電所の燃料になる。しかし、アンデルセンのメルヒェンが示しているように、何年もかけて大きく成長した樅の木を、家族の祭りを盛り上げる最大の小道具として利用するために切り倒し、木

12 <http://www.handelsdaten.de/statistik/daten/studie/214313/umfrage/zahl-der-verkauften-weihnachtsbaeume-in-deutschland-zeitreihe> (04.01.2015)

の命を奪ってしまうのであるから、再利用されるとはいえども、果たして本当に環境に優しいのかどうか考えさせられる。

3. グリム童話のクリスマスメルヒェン

各々のあらすじをここで確認しておく。「灰かぶり」は後に MF と比較するので、他のメルヒェンよりもあらすじを詳しく紹介しておく。

3.1 「蛙の王子様あるいは鉄のハインリヒ」のあらすじ

夏の暑い日に王女が、森の中の井戸の近くで金のボールを使って一人遊びしていた。ボールをキャッチするのに失敗して、ボールが井戸の中に落ちてしまい、自分ではボールを取りに行けないので泣いていると、蛙が現われた。蛙に泣いている理由を聞かれたので、王女がその理由を答えると、蛙はボールを取ってくる褒美として、王女に好きになってもらい、一緒に遊んだり、寝食を共にしてもらうことを望んだ。王女は、蛙が本当にそんなことをするとは思わなかったので、蛙の望み通りにすることを約束した。ボールを蛙が取ってきてくれた翌日に、蛙が王女を訪ねて来た。王女は蛙に会いたくなかったが、父王に「約束していたことは守るように」と諭され、蛙を中に入れ一緒に食事をした。食後、王女は蛙と一緒に寝たくなかったが、父王に「助けてくれた人を蔑んではいけない」と注意されたので、蛙を寝室に連れて行った。王女がベッドに横たわると蛙が来たので、蛙をつかんでありったけの力で壁に投げつけた。すると蛙にかけられていた魔女の魔法が解けて、王子が現われた。二人は結婚し幸せに暮らした。

3.2 「兄と妹」のあらすじ

男の子(兄)と女の子(妹)は継母の魔女に意地悪をされていたので、ある日、家出をする。継母は森の中の全ての泉に呪いをかけ、泉の水を飲んだものを動物に変身させた。兄は、泉が呪われていると妹から聞いていたが、喉の渇きに耐えられず、妹の忠告を無視して泉の水を口にし

たので鹿に変身してしまった。兄と妹は森の中で誰も住んでいない小屋を見つけて、そこで生活する。鹿は狐笛の音を聞くと笛の音の聞こえる方に行ってしまう、狩りに来ていた王たちに追いかけられた。日が暮れると鹿が小屋に戻って来て、「妹よ、中に入れておくれ」とお決まりの文句を言うと、妹が小さい扉を開けて中に入れてくれた。王の狩人がこれを見て王に報告すると、王自ら小屋に向いてお決まりの文句を言って試してみた。すると戸が開き、中に入ってみるととても美しい娘がいたので求婚した。娘は鹿を連れて城へ行き、この王と結婚した。

魔女は継子たちのことを耳にしたので、召使に化けて産後の王妃の部屋に忍び込んで王妃を殺害し、彼女の代わりに自分の娘をベッドに寝かせておいた。王妃は夜中の12時になると寝室に現われ、赤ちゃんと鹿の世話をしてから消えた。その様子を見た乳母が王に報告し、王がそれを自分の目で確かめる。王が夜中の12時に本物の王妃に会えたので話しかけると、王妃は神の加護を受け、命を取り戻した。魔女は火刑に処され、魔女の娘は森の野獣に八つ裂きにされた。魔女が死に、兄は魔女の呪いから解放されて人間の姿に戻り、兄と妹は一緒に幸せに暮らした。

3.3 「ヘンゼルとグレーテル」のあらすじ

貧しい樵の家族の子ども、ヘンゼルとグレーテルが森に捨てられる。最初に森に捨てられたときは、ヘンゼルが月明かりで光る小石を道標に撒いていたので、それをたどって帰宅できた。2回目に捨てられたときには小石を持っていなかったもので、パン屑を道標に撒くと、鳥に啄ばまれてしまい目印を失い帰れなくなった。森の中をさ迷い、やっと発見した家が菓子でできていたので、屋根や窓の部分を食べっていると、家の中から年老いた女が出てきて、子どもたちに家の中でご馳走を与えた。一晩この家に泊まるが、翌朝からヘンゼルは家畜小屋に閉じ込められ、グレーテルは家事をさせられた。二人は魔女に捕まり、魔女はヘンゼルを太らせてから食べるつもりで、毎日ヘンゼルの指を触って太り具合を確認していたが、ヘンゼルは機転を利かせて、視力の弱い魔女に骨を触らせてまだ太っていないと思わせていた。ある日、魔女はヘンゼルが太るのを待ちきれなくなり、グレーテルにオーブンの火加減を確認させよう

とする。グレーテルが「どうやってオーブンに入ったらいいか分からない」ととぼけると、魔女はオーブンに頭を突っ込んだので、グレーテルが魔女をオーブンの中に押し込み、オーブンの扉を閉めて魔女を焼いた。グレーテルはヘンゼルを家畜小屋から解放し、魔女の宝を持ち帰って、父と3人で楽しく暮らした。

3.4 「灰かぶり」のあらすじ

裕福な男の妻が病床に伏していた。彼女は娘をベッドのわきに呼びよせて、「愛する子よ。信心深くしているのよ。いい子でいるのよ。そうしたら神様がいつもあなたのそばにいてくれるの。お母さんは天の上からあなたのことを見ているから。あなたのそばにいるからね」と遺言して死んでしまった。やがて父親が新しい母親を迎えた。彼女には邪悪な心を持った娘が二人いた。新しい家族は、継子に一日中台所仕事をさせた。彼女は窯のそばの灰の中で寝ていて灰だらけだったので、「灰かぶり」と呼ばれた。

ある日、父親が見本市に行くことになり、お土産に何が欲しいか娘たちに聞いた。灰かぶりは、「帰り道に一番最初にお父様の帽子に刺さった枝を持ち帰ってください」と頼んだ。ハシバミの木の枝が帽子に刺さったので、それを父親が持ち帰り、灰かぶりはその枝を母親の墓に植えると、立派な木に成長した。いつしか白い鳥がこの木の上に飛んでくるようになり、灰かぶりが欲しいものを言ったら、この白い鳥が望みの品を持って来てくれた。

ある日、王子の花嫁探しの舞踏会が開催されることになり、国中の若い女性が招待された。灰かぶりも参加しなかったので継母に懇願すると、「レンズマメを灰の中に撒いたから、それを2時間以内に選り分けられたら連れて行ってもいい」と言われたので、庭に出て鳥たちに助けを求めた。すると2羽の鳩に続いてたくさんの鳥たちがやって来て豆をついばんでくれたので、1時間もかからないうちに豆の選別が終わった。継母はそれでも納得せず、さらにボール二つ分の豆を灰の中に撒いて、今度は1時間以内に選別するように言いつけた。このときも鳩たちに手伝ってもらい、時間内に豆を選り分けられたけれども、継母は灰かぶりを

一緒に連れて行かなかった。

灰かぶりは母親の墓に行き、ハシバミの木の下に立って、「立派なハシバミの木さん、あなたを揺するわよ。揺すぶるから、金と銀の衣装を私の上に落としてちょうだい」と叫ぶと、金と銀でできたドレスと、シルク製で銀の刺繍が施されたミュールを白い鳥が空から落とした。城には継子たちもいたが、豪華な衣装を身につけて王子と踊っているのが灰かぶりだと気付かれなかった。夜になり、灰かぶりは王子から逃げるように急いで城を後にし、家の近くで鳩小屋に飛び乗った。王子が追いかけてきて、年老いた男に、誰が鳩小屋に飛び乗ったのか尋ねてみると、「灰かぶりかもしれない」と男が言って、斧を持ってこさせて鳩小屋を壊すが、中には誰もいなかった。灰かぶりは墓で素早く着替えを済ませ、灰の上に戻っていた。

翌日も舞踏会が催され、継母たちが出かけてから灰かぶりは母親の墓に行き、木にお願いをすると、鳩が昨日のよりもっと素敵なドレスを持って来た。王子とダンスを楽しんでいたが、夜になったので灰かぶりは一人で急いで家に帰った。王子が後を追うが、梨の木のところで彼女が消えたので、父親が来るまで待ち、木の上に女の子が登って行ったことを伝えると、父親は「灰かぶりかもしれない」と思ったので、この木を伐った。灰かぶりは素早く着替えを済ませて、とっくに灰の上に戻っていた。3日目も継母たちが舞踏会に出かけてから、例のハシバミの木にお願いをすると、これまで見たことがない立派なドレスと金のミュール（靴）を鳩が持って来た。それを着て城を訪れ、王子とダンスを楽しむが、帰る時間になった。王子が知恵を働かせて、階段にコールタールを塗り付けておいたので、灰かぶりは階段を下りるときに左足の靴が階段に引っついて脱げてしまうが、そのまま去って行った。翌朝、王子はこの靴を持って灰かぶりの家を訪ね、「この靴の持ち主と結婚する」と父親に伝えた。すると継子たちは大喜びし、靴を履いてみるがサイズが合わない。上の娘は、継母に足の親指を切断されて、靴を履くことができた。王子はこの娘を馬車に乗せて城へ向かった。2羽の鳩が、「よく見てごらん、よく見てごらん。靴に血がついてる。靴が小さすぎる。本物の花嫁はまだうちにいる」と囁っていた。彼女の足を見てみると血が出ていたので、娘の家に戻り、下の娘にこの靴を履かせてみた。今度は

踵が大きすぎたので、継母は彼女の踵を切り落として無理やり靴を履かせた。王子はこの子を嫁として連れて帰るが、途中でまた鳩の囁りが聞こえ、娘の足から血が出ているのに気付いて引き返した。王子が灰かぶりの父親に「他に娘がいないのか」と聞くと、前妻の子がいることを告げられ、灰かぶりにこの靴を履かせてみるとぴったり合った。二人は馬車で城へ向かい、鳩たちは「本物の花嫁が乗っている」と囁り、鳩は灰かぶりの肩に1羽ずつとまって一緒に城へ行った。結婚式の日に、継子たちが灰かぶりの幸運のおこぼれをもらおうと教会まで来たが、鳩に目を啄ばまれて、二人とも盲目になった。

3.5 「ホレおばさん」のあらすじ

夫を亡くした女性に二人の娘がいた。一人は美しく働き者の継子で、もう一人は醜くて怠け者だが実娘だった。継子は毎日、井戸のそばに座り、血が出るほど糸紡ぎをさせられていた。あるとき、糸巻き棒が血だらけになったので井戸で洗おうとすると、誤って糸巻き棒を井戸の中に落としてしまった。継母に糸巻き棒を井戸の中から取ってくるように言われたので、美しく働き者の娘は、思い切って井戸の中に飛び込んだ。

気を失い、目が覚めてみると井戸の中には太陽が出ていて、一面に花畑が広がっていた。しばらく歩いていくとパンがたくさん入ったオープンがあり、パンたちにオープンの中から出して欲しいと言われたので、娘はパンを全て取り出した。道を進んで行くと、今度は実が熟したリンゴの木があり、木を揺らしてリンゴを落として欲しいと言われた。娘はリンゴを木から落とし、1箇所に集めてから先に進んだ。すると1軒の小さな家を見つけ、そこから大きな歯を見せた老女（ホレおばさん）が出てきたので、あまりの怖さに逃げ出そうとしたが、この老女に優しく話しかけられたので安心し、家事を手伝うことになった。彼女の布団を娘が窓からはたくと羽毛が舞い、人間界に雪が降った。しばらくの間、娘はホレおばさんのもとで真面目に働いていたが、家に帰りたくなった。ホレおばさんが娘を入口の門まで送り、娘が門の下に立つと黄金の雨が降ったので、全身金に包まれた。継子から一部始終を聞いた継母は、実娘にも井戸のほとりで糸紡ぎをさせた。この子は故意に糸巻き棒を井戸

の中に落として、井戸の中の世界へ飛び込んだ。怠け者の娘は、初日しかホレおばさんの手伝いをしなかったので、家に帰された。この子が門の下で褒美にもらったのはコールタールで、体にべっとりとへばりついて一生取れなかった。

3.6 「ブレーメンの音楽隊」のあらすじ

小麦の袋を背負えなくなり厄介者になったロバは、飼い主に飢え死にさせられる前にブレーメンで音楽隊になろうとして家を出た。道中、ロバは、猟犬としての役割を果たせなくなった犬と出会い一緒に連れて行く。次に、ネズミを捕まえられなくなった年老いた猫に会い、一緒にブレーメンに行こうと誘う。最後にスープにされる予定だった鶏と出会い、この鶏も一緒にブレーメンを目指す。夜になり、森の中で一夜を明かすことにした。空腹だったので食料を探しに行くと、盗賊の住む家にご馳走がたくさんあったので、盗賊たちを脅かして追い出して、ご馳走にありついた。盗賊の一人が家の中に入ってきたが、明かりが消えた暗い家の中で動物たちに脅かされてひどく怖い思いをして逃げ出し、家の中には魔女がいると、仲間に報告したので、盗賊たちは二度とこの家に戻ってこなかった。こうして動物たちは、一生暮らせる家を確保できた。

3.7 「雪白と薔薇赤」のあらすじ

雪白と薔薇赤という名前の仲良し姉妹が、母親と一緒に暮らしていた。彼女たちは信心深く良い子であった。白薔薇はおとなしく、家で母親の手伝いをするのが好きで、赤薔薇は活発で外で花を摘むのが好きだった。彼女たちは森の動物たちからも好かれていた。冬になると母親が本を読み聞かせてくれた。ある晩、熊が訪ねて来た。それから毎日、この熊が泊まりに来るようになった。春になり、熊は白薔薇に「これから遠くまで出かけるので夏の間はここに戻って来ない」と告げる。白薔薇が「どこへ行くの?」と聞いてみると、「森に行つて悪い小人から宝物を守らないといけない」と答えた。

ある日、姉妹は、森の中で長い髭が木に挟まった小人を見つける。二

人は小人を助けようとするが、小人は文句ばかり言っている。引っ張っても木から髭が抜けなかったので、白薔薇が持っていたハサミで髭を切ると、小人はひどく怒って礼も言わずにどこかへ行ってしまった。

魚料理を作ろうと魚釣りに行くと、前の小人が釣竿の糸に髭を絡ませて困っていた。二人が糸を解こうとするがほどけなかったので、髭をハサミで切ったら、また小人は怒ってどこかへ行ってしまった。

今度は、小人は鷲に捕まえられていた。姉妹が小人を助けると、スカートが破れたと文句を言われ、小人は今回も礼も言わずに去っていった。夜になり、小人が袋から色とりどりの宝石を取り出して見とれていると、姉妹が通りかかった。そこに熊が出てきて、小人を一撃で殺した。姉妹は熊に呼び止められて、熊のところへ行ってみると、熊の毛皮が落ちて、金の服を着た美しい男が現われた。この熊はじつは、小人に呪いをかけられて熊に変身させられていた王だった。小人が死に、呪いが解けて、元の姿に戻った。王は白薔薇と結婚し、赤薔薇は王の兄弟と結婚し、母親は娘たちと一緒に幸せに暮らした。

3.8 グリム童話のクリスマスメルヘンの特徴

グリム童話の中のクリスマスメルヘン7話の特徴をまとめてみると、「プレーメンの音楽隊」以外は主人公が子どもであり、女の子が主人公の話が多い。これは、クリスマスの主役が子どもたちであることと関連していると考えられる。クリスマスには子どもたちがクリストキント¹³やサンタクロースからプレゼントをもらうのを楽しみにし、良い子にして待っている。プレゼントをもらえるのは、グリム兄弟の時代だと、良い子にしているだけではなく、信心深くなければならなかったが、現代では宗教性が薄れてしまい、良い子であることだけが強調されている。グリム童話ではよく働く子どもが評価され、さらに女の子には優しさが求められて (KHM15, 161)、仲良しのきょうだいや姉妹が描かれている

13 ここで言うクリストキントは、クリスマスプレゼントを持ってくる天使の姿をした女性を指す。ヴェーバー＝ケラーマン著『ドイツの家族 古代ゲルマンから現代』鳥光美緒子訳、勁草書房、1994年、244ページ。

る (KHM11, 15, 161) ことも、クリスマスメルヒェンの特徴である。そしてこの7話に共通しているのは全てハッピーエンドである点であり、王や王子と結婚したり (KHM1, 11, 21, 161)、経済的に困窮状況から解放されたり (KHM15, 24)、仲間と一緒に住む家が見つかったり (KHM27) し、主人公は一人ではない。家族や新しい伴侶、仲間たちと暮らせることが幸せであり、現代においてクリスマスに家族と共に過ごすことに幸福感を見出すことと通じるのではないか。そのため、メルヒェンにクリスマスのお祝いやクリストキントや樅の木などクリスマスに必要な事物が登場しなくても、家族と一緒にいることの素晴らしさを再認識できる話が、クリスマスメルヒェンと呼ばれるようになったのではないかと解釈できる。

アンデルセン童話とグリム童話のクリスマスメルヒェンの大きな違いは、グリム童話にはクリスマスにまつわる話が1話もないことである。しかし、グリム童話の後に付け加えられた「子どもの聖者伝」(Kinderlegenden) 10話のうち、最後の話「ハシバミの枝」(„Die Haselrute“) にクリストキントが登場している。この話はKHM第6版(1850年)から収録されている¹⁴。しかし、このクリストキントは、贈り物を持ってくる女性ではなく、幼子イエスである。クリストキントが昼寝をしている間に、母親が森にイチゴ狩りに出かけ、森の中で毒蛇に遭う。ハシバミの木の後ろに隠れたら、毒蛇から身を守れた。「ハシバミの木が私の身の危険を守ってくれたように、これからもすべての人びとをお守りください」と聖母が願い、緑のハシバミの枝が蛇や毒蛇といった地上を這い回る動物から身を守るようになった、と語られている。

グリム童話集の最後にこの話が収録されているのは、オーストリアのヨーゼフ・フランツ・フォンブン (Josef Franz Vonbun) の類話の注釈と共通していると考えられる。フォンブンは、「(昔からの) 民間信仰がキリ

14 ハイント・レレケ (Heinz Rölleke) の注釈による (Rölleke, Heinz: *Kinder- und Hausmärchen*. Band 3. Stuttgart: Reclam 1994, S.517f) とオーストリアのフォアアールベルク地方の伝説「ハシバミの枝」(D'Haslaruetha) に手を加えたものであるとされている。Vonbun, Josef Franz: *Volkssagen aus Vorarlberg*. Wien: P.P. Mechtharisten 1847, S.7.

スト教の教義にもよりどころにされてきた。昔からハシバミの枝の神通力が信じられてきたので、これをキリスト教の伝説にも織り込んで忘れられないようにしていた¹⁵、と解説している。民間信仰に代わってキリスト教が台頭してから、古代からの慣習（Sitten）が忘れ去られようとされていたが¹⁶、グリム兄弟はフォンブングが述べるように、メルヘン集の最後の子どもの聖者伝に、ゲルマン的な要素を含んだハシバミの枝の話の配置することにより、このような古い民間信仰が長い年月をかけて読み継がれ、後世の人びとの記憶に残ることを望んでいたであろう。当時、グリム兄弟が活躍していた19世紀に、キリストキントやサンタクローズがプレゼントを運んでくると子どもたちに信じられ、またクリスマスの文化が市民階級に定着し始めていたので、現在進行中の生きた文化について書きとめておく必要性はない、とグリム兄弟は判断したに違いない。それゆえにクリスマスに必要な小道具はグリム童話集に現われないのであろう。

4. メルヘン映画「灰かぶりの三つのハシバミの実」 (*Drei Haselnüsse für Aschenbrödel*) の考察

1950年にシャルル・ペロー（Charles Perrault）の「サンドリヨン」（„Cendrillon“）を下敷きにしたウォルト・ディズニー（Walt Disney）の映画「シンデレラ」（*Cinderella*）¹⁷が、「灰かぶり」の映画版としてドイツでも有名であるが、その他にKHM21を素材にした映画もドイツで製作されている。その中の一つ、「灰かぶりの三つのハシバミの実」は、クリスマスの時期になると毎年複数回再放送され、カルト映画（Kultfilm）とも呼ばれている。この映画は、映画監督ヴァーツラフ・フォーリチェック（Václav Vorlíček）が、ドイツのモーリッツブルク城やバーベルスベルク映画スタジオ、また当時のチェコスロバキアのバランドフ撮影所

15 Vonbun, S.8.

16 Vgl. Brüder Grimm; *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. von Heinz Rölleke. Band 1. Stuttgart: Reclam 1991, S.16.

17 *Cinderella*. R.: Walt Disney, USA 1950.

で、チェコスロバキアやドイツからキャストを迎えて製作し、1973年に完成した。音楽演奏はプラハ交響楽団によるもので、ドイツ民主共和国の教育政策に適うよう芸術的価値の高い作品に仕上がっている。この映画は、20本以上ある DEFA のメルヒェン映画の中で、最も人気のある作品になった¹⁸。ドイツ民主共和国の映画館で上映されてから、後に1974年12月19日にはドイツ連邦共和国の映画館でも上映され、その翌年のクリスマスには第1テレビ（ARD）で初放映された。それ以後、クリスマスには定番のテレビ番組となり、2000年以降は放映回数が増え、2014年には12月24日から26日の3日間の間で12回も放映されていることから、その人気の高さがうかがえるだろう。話の内容はグリム童話ではなく、グリム童話をもとにして書かれたチェコのメルヒェンを素材にしている。ボゼナ・ネムコヴァ（Božena Němcová）のメルヒェン集に採用されている話¹⁹で、このメルヒェン集の一部がドイツ語に訳されている²⁰が、MFは訳されていないので、映画の話と原話との比較はできなかった。本稿では映画バージョンとKHM21とを比較考察して、クリスマスに求められている事柄を読み取ってみたい。映画のあらすじを紹介しておく。

4.1 「灰かぶりの三つのハシバミの実」のあらすじ

両親をなくした主人公の女の子（灰かぶり）が、継母と継姉と同じ敷地内で暮らし、他の使用人たちと一緒に働いていた。家事の合間に仲良しの梟（ロザリー）に会いに行き、また馬小屋にいる父にもらった白馬（ニコラス）にこっそり会いに行き、乗馬を楽しむこともあった。心優しい娘で、猫や鳩の世話もしていた。

18 Vgl. Kaneshiro-Hauptmann, Akemi: „Gedanken zu Grimms Märchen als Populärkultur“. 関西大学独逸文学会編『独逸文学』第57号、2013年、113-133頁。S.118f.

19 Langer, Gudrun: Art. „Němcová, Božena“. In: Brednich, Rolf W. (Hg.): *Enzyklopädie des Märchens*. Band 9. Berlin / New York: De Gruyter 1999, Sp.1354-1358.

20 Němcová, Božena: *Das goldene Spinnrad und andere tschechische und slowakische Märchen*. Leipzig: Kiepenheuer 1980.

ある日、継母に叱られている若い使用人を助け、そのあと継母に愚痴をこぼしたら、継母に灰の中に撒いたえんどう豆を取り出してから謝るように要求された。どうやって豆を拾おうか困っていると、白い鳩がたくさん集まって来て、豆を選び分けてくれた。鳩が豆を選っている間に、灰かぶりは厩へ行き、ニコラスに乗って一面銀世界の森へ出かけた。

この日は継母たちの家に王や王子が立ち寄ることになっていて、継母たちは王の訪問のことしか頭になかった。だから灰かぶりが乗馬に出かけても気付かれなかった。

森の中で、王子が子鹿を弓矢で射止めようとしていた。矢を放とうとした瞬間に、灰かぶりは王子に雪玉を投げて妨害した。王たちは、雪玉を投げた犯人を探し、灰かぶりは足が速いうえに木登りも上手だったので、なかなか見つからなかった。王子たちに灰かぶりが見つかったときに、「なーんだ、女かよ」と嘲笑されたので、灰かぶりは「バカ」と罵り、素早く逃げて家に帰った。

別の日に、灰かぶりが雪の降る中、川のほとりで洗濯していると、馬車に乗った使用人が通りがかる。「買い物に行くが欲しいものがあれば何でも持って帰ってくる」と話しかけられたので、灰かぶりは、「道中、鼻の上に落ちたものを持って帰ってきてほしい」と頼んだ。使用人は、買い物帰りに馬車の上で居眠りしてしまい、それを見た王子は、面白半分に鳥の巣が使用人の頭の上に落ちるように矢を放つ。使用人の鼻の上に鳥の巣が落ちてきて、目を覚まし、巣の中にハシバミの実が三つ入っていたので、それを灰かぶりに持ち帰った。彼女はそれを喜んでもらい、継母に「お前はリスか」と罵られた。

継母と実娘（ドーラ）が町に出かけている間に、灰かぶりはハシバミの実を持ってロザリーのところへ行く。王子にまた会いたいと言ったら、実が一つ落ちて、実を拾うと、殻の中から帽子やマントなど狩人に変身できる衣装が出てきたので、それをまとって森へ出かけた。森では王子たちが狩りの競争をしていた。最初に禽獣を射止めた人が優勝することになり、優勝賞品は指輪だった。王子が打とうとした鷹を狩人に変身した灰かぶりが先に打ち落としたので、彼女に指輪が与えられた。

ある日、城でパーティーが開かれることになり、灰かぶりも参加してもいいか継母に尋ねると、連れて行ってほしいのであれば豆を選び分け

てからだ、と言われた。すると、鳩たちが現われ、豆の選別をしてくれた。灰かぶりはロザリーのところに行き、「私がダンスに初めて行くときには、ピンク色のドレスをプレゼントするって母は言ったのに、ドレスをもらえなかったの。でも魔法の実があるからいいわ」と言って、ハシバミの実を一つ後ろに投げてみたら、ドレスが出てきた。そのドレスを着て城へ行くと、皆が彼女の美しさに驚く。

王子と一緒に踊り、王子に誰なのか聞かれたので、なぞなぞを出す。「灰まみれだけど、煙突掃除人じゃない。雌鳥で羽が生えていないけど、猟師じゃない。銀の衣装を身にまとっているけどお姫様じゃない。誰のこと？」と聞いてみるが、王子には答えが分からなかった。灰かぶりは失望して城を去る。急いで城の階段を下りたので、靴が片方だけ脱げてしまい、王子はその靴を拾って、灰かぶりを追いかけると継母の領地にたどりついた。皆に靴を履かせてみるが、誰の足にも合わなかった。王子が、「他に女の人はいないか」と聞いてみると、召使が「灰かぶりがいる」と言い、灰かぶりを皆で探す。継母が灰かぶりの部屋まで行き、ドレスを脱がせてそれを実娘に着せて、王子のところに連れて行き、実娘との婚約を迫った。継母とドーラが馬車に乗って家を出ると、王子が後を追ってきた。しかし継母の馬車が転倒して池に落ち、にせものの花嫁だということがばれた。灰かぶりは、最後のハシバミの実を取り出して床の上に落としてみると、ウエディングドレスが出てきたので喜ぶ。それを着て、皆が集まっている中庭に白馬に乗って登場し、「私の靴を返してください。指輪をお返しするわ」と言う。先に王子が答えられなかったなぞなぞをもう一度出してみると、今度は正解が返ってきた。灰かぶりは王子の求婚を承諾し、城へ向かった。

4.2 グリム童話の「灰かぶり」と映画「灰かぶり」と三つのハシバミの実」の相違点について

MFはKHM21を素材にしているとは言えども、共通点は極めて少ない。主人公が、継母とドーラに台所仕事をさせられ、灰まみれになっている点や、足が速く木登りが得意であること、灰の中の豆を選別する点、パーティーの後、急いで階段を駆け下り靴が脱げてしまう点ぐらいしか、共

通点がない。MFの主人公は、KHMの灰かぶりのように、母親の墓参りに行ったり、ハシバミの木に何度も願い事をしたりしない。つまり、先立たれた親を頼ってはいない。しかし、ハシバミの実に魔力があることを知っていて、宝箱に入れて継母たちに見つからないようにロザリーのいる小屋に隠し、必要なときに欲しいものを願って実から取り出していた。豆拾いの場面では、グリム童話の灰かぶりのように、鳩に助けを求めるのではなく、鳩たちが自ら灰かぶりを手伝いに来る。普段から灰かぶりが鳩にも優しく接していたので、その恩返しに来たのである。

このMFの灰かぶりは気が強く、プライドが高い。王子と森の中で2度も会っているのに、王子はダンス中に彼女の正体に気が付かなかったので、彼女は王子に失望して家に帰ってしまう。相手が王子だからといってへりくだることはなく、自己主張しているのが特徴的である。一方で、欲しい物は魔法を使ってでも手に入れるというしたたかさも、兼ね備えている。権力に屈しない、強気だが心優しい女性が描かれていて、これが、今も昔も理想的な女性像なのかもしれない。この映画の登場人物だが、継母も継姉も意地悪ではあるが、聴衆の笑いを誘うシーンがいくつもあり、聴衆に嫌な印象だけを与えるわけではない。ドイツには乗馬が好きな女性や子どもが多いので、雪の中を馬に乗り颯爽と駆け抜ける灰かぶりに憧れる人も多い、と思われる。それぞれの登場人物のキャラクターにユーモアがあり、全体的に調和の取れた作品に仕上がっており、それもこの映画が好かれる理由だと考えられる。

おわりに

ドイツのクリスマスは多くの家庭では山のようにプレゼントをもらえる日になり、消費の祭り（Konsumfest）とも呼ばれるが、プレゼントの中身は16世紀から変わっていない。おもちゃや菓子、本、洋服など²¹、今も昔も生活に必要なものをこの時期にまとめて購入してプレゼントにしているにすぎない。さらにインゲボルク・ヴェーバー＝ケラー

21 Rietschel, Georg: *Weihnachten in Kirche, Kunst und Volksleben*. Bielefeld / Leipzig: Velhagen & Klasing 1902, S.192.

マン（Ingeborg Weber-Kellermann）によると、1970年代と19世紀のブルジョワ的クリスマスの祝いと今日のクリスマスの祝いは、以下の点で何ら変わっていない。

親たちがたくさんの伝統的な小道具（緑の枝と明かり、合唱と合同の遊戯、贈り物、一緒に飲み食いすること）を活用し、長時間準備して家族的な内的調和の夕べを作り上げる。それによって全ての葛藤を和らげ、ひとときだけでも聖なる世界のユートピアを魔法で呼び出そうとしたのだろうか²²。

このヴェーバー＝ケラーマンの見解は21世紀にも通用し、「聖なる世界のユートピア」を呼び出すのに、メルヒェンが利用されているのではないか。特にクリスマスの時期にメルヒェンに触れ、メルヒェンを映像や劇で体験することにより、すでに文化的記憶となっているグリム童話を再確認し、同時にそれに付随する他のポジティブな記憶も想起して、家族で幸福感を共有することが、聖なる世界のユートピアなのかもしれない。メルヒェンが、このユートピアへの入り口を開くのだろうか。では、なぜ家族と過ごす時間が貴重なのだろうか。

ドイツは日本よりもライフワークバランスが取りやすいと思われがちだが、近年は雇用者の働き方の変化や雇用形態の変化があり、子どもの学校生活や余暇の過ごし方も変化し、日々家族とともに充実した生活を送るのは困難になってきている。こういう時代だからこそ、家族が集まり家で静かに祝えるクリスマスの祝日に、家族の結びつきを再認識し幸福感を味わいたいという期待感が、以前より高まっていると考えられる。一方で、このような祭りをストレスに感じる人や、こういう世界に浸りたくない人びとも存在し、彼らはたいてい外国でクリスマスを祝う。いずれにせよクリスマスは、「特別な日」であることに変わりはない。

参考文献

Andersen, Hans Christian: *Sämtliche Märchen. Aus dem Dänischen von Thyra Dohrenburg.*

22 ヴェーバー＝ケラーマン 1994年、241ページ。

- Mit Illustrationen von Vilhelm Petersen und Korenz Frølich. Düsseldorf / Zürich: Artemis & Winkler 1996.
- Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen*. Hrsg. von Heinz Rölleke. Band 2. Stuttgart: Reclam 1995.
- Hinrichsen, Torkild: *Weihnachten in Europa. Entdeckungsreise und Bild-ABC zu Unterschieden und Gemeinsamkeiten*. Husum: Husum 2004.
- 野口芳子「近代家族における家父長制の象徴『クリスマスツリー』」、富士谷あつ子・伊藤公雄編著『日本・ドイツ・イタリア超少子高齢社会からの脱却：家族・社会・文化とジェンダー政策』明石書店、2009年、88-97ページ。

Deutsche Weihnachten und Märchen

Akemi Kaneshiro-Hauptmann

Das Weihnachtsfest ist die Feier der Geburt des Christkinds. Die Zahl der Gläubigen nimmt in Deutschland allerdings von Jahr zu Jahr ab, so dass das Fest meines Erachtens seinen religiösen Sinn immer mehr verliert, und zu einem Familien- und Konsumfest wird. An den Weihnachtsfeiertagen und auch in der Adventszeit entwickelt jede Familie ein eigenes Ritual oder eine eigene Familientradition, dazu gehören manchmal auch Märchen. In der Weihnachtszeit begegnet man oft Märchen: Märchenerzähler/innen sind unterwegs auf den Bühnen der Weihnachtsmärkte und Einkaufszentren, es gibt Märchenecken auf den Weihnachtsmärkten (z.B. auf dem Dresdner Striezelmarkt), Märchentheater, Büchertische mit Märchenbüchern und Märchenfilme im Fernsehen. Warum werden Märchen in der Weihnachtszeit oft verwendet, obwohl kein Märchen in den *Kinder- und Hausmärchen* der Brüder Grimm mit Weihnachten in Verbindung steht?

Es gibt so genannte „Weihnachtsmärchen“ u.a. die Grimms Märchen „Der Froschkönig“, „Brüderchen und Schwesterchen“, „Hänsel und Gretel“, „Aschenputtel“ und das Märchen „Schneekönigin“ von Hans

Christian Andersen, zumindest findet man diese Erzählungen unter diesem Stichwort in der *Enzyklopädie des Märchens* von Hans-Jörg Uther. Bei diesen Weihnachtsmärchen wird versucht, herauszufinden, was sie mit Weihnachten zu tun haben und welche Erwartung man zu Weihnachten hat. Außerdem wird der beliebte, in der DDR produzierte Märchenfilm *Drei Haselnüsse für Aschenbrödel* analysiert und mit Grimms „Aschenputtel“ verglichen.

Es geht um das Familienglück in der Weihnachtszeit, Märchen wecken viele, schöne alte Erinnerungen aus der Kindheit, besonders in der Weihnachtszeit. So sind Märchen ein Bestandteil der deutschen Weihnachtskultur geworden.